

# 漁海況年報

平成20年1月1日～12月31日

静岡県水産技術研究所  
(電話 054-627-1815)  
静岡県水産技術研究所伊豆分場  
(電話 0558-22-0835)

## 【黒潮流路】

図1に黒潮流型の区分を、表1に近年の流型の経過を示した。また、図2には平成20年1～12月における月別の前半、後半の代表的な黒潮流路を示した。

潮岬以西では、1月～2月中旬、都井岬沖をかなり離岸して流れた。1月～3月上旬に足摺岬沖では離岸傾向で推移した。1～2月に室戸岬沖では接岸傾向で推移したが、3月上旬に離岸傾向となった。4月には九州南東沖で1月に形成された小蛇行が潮岬沖まで達した。また、4月中旬には九州南東沖で小蛇行が形成され、都井岬沖をやや離岸して流れた。6月には九州南東沖の(海上保安庁海洋情報部より)小蛇行が四国沖まで拡大し、都井岬沖～足摺岬沖で著しく離岸したが、7月上旬になると小蛇行の一部が四国沖を抜けたため、やや接岸した。8～10月には九州南東沖に残っていた小蛇行が次々と四国沖を東進した。10月下旬には都井岬～潮岬沖で接岸傾向となった。11月、C型流路の規模の拡大し、室戸岬～潮岬沖では離岸傾向となった。

潮岬以東では、1月～3月上旬、潮岬沖を接岸して流れた。1～2月に熊野灘～相模湾は概ね冷水域であったが、一時的な暖水波及が繰り返しみられた。3月上旬には小蛇行の東進に伴い、伊豆諸島北部～相模湾にかけて暖水波及があった。房総沖では1月に蛇行に伴う離岸がみられたが、2月には接岸傾向となり、4月には再び離岸傾向となった。4月中旬～5月中旬には、黒潮内側逆流が発達し熊野灘～伊豆諸島北部海域で暖水波及がみられた。熊野灘～遠州灘では7月中旬～8月下旬にも暖水波及がみられた。また、伊豆諸島南部海域は5月下旬以降、冷水に覆われていたが、7月下旬に冷水は東方へ移動した。9～10月には熊野灘～伊豆諸島域で黒潮内側逆流が断続的に形成され、11月には内側逆流から切り離された小暖水渦が御前崎沖を西進し、遠州灘沖に停滞した。

平成20年の黒潮流型は、2月上旬にC型からN型に、4月下旬に一時的にB型となったが、5月下旬以降、再びC型流路で経過した。

(資料：海洋速報(海上保安庁)・関東・東海海況速報)

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平成元年	B	C	C	C	C	DW	C	N	N	N	N	N
2年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	AG	C
3年	C	C	C	C	C	C	C	C	CD	C	C	C
4年	C	DC	N	N	N	N	BD	C	DN	N	N	N
5年	N	N	N	N	N	B	BC	C	C	C	C	C
6年	B	C	D	N	N	C	C	NN	N	N	N	N
7年	NN	N	N	N	N	B	B	C	C	C	D	DN
8年	C	D	D	D	W	D	N	N	N	N	N	N
9年	N	D	D	D	C	C	CW	D	ND	N	D	C
10年	D	C	N	N	D	N	N	N	N	N	N	N
11年	CW	W	WB	C	C	C	C	C	C	C	C	C
12年	C	C	CW	W	WB	B	BC	CW	WB	C	C	C
13年	C	C	C	C	CD	C	C	C	WN	B	C	C
14年	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N
15年	N	N	N	N	N	D	NW	WN	B	BC	D	N
16年	N	N	N	N	N	N	N	N	N	NA	A	A
17年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	G	C	C
18年	N	N	N	NB	C	CNC	CN	N	N	N	N	N
19年	N	BC	D	B	B	C	C	C	C	C	N	B
20年	C	C	N	N	N	N	B	B	C	C	C	C

表1 黒潮流型一覧表

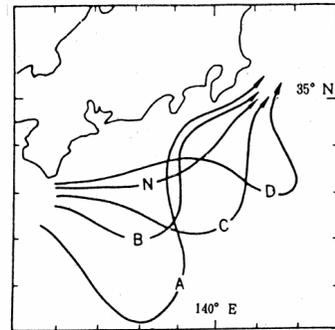


図1 黒潮流型の区分

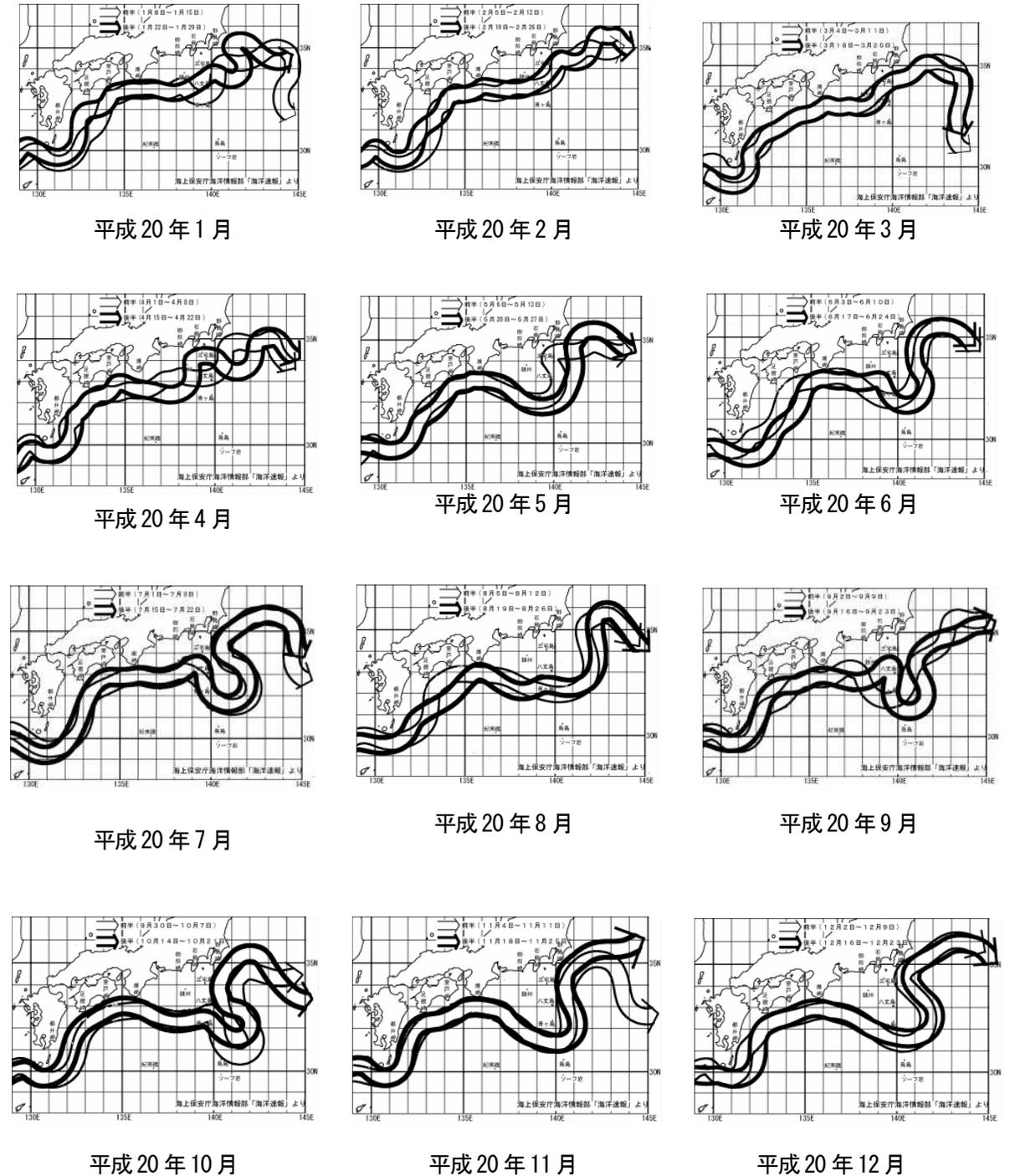
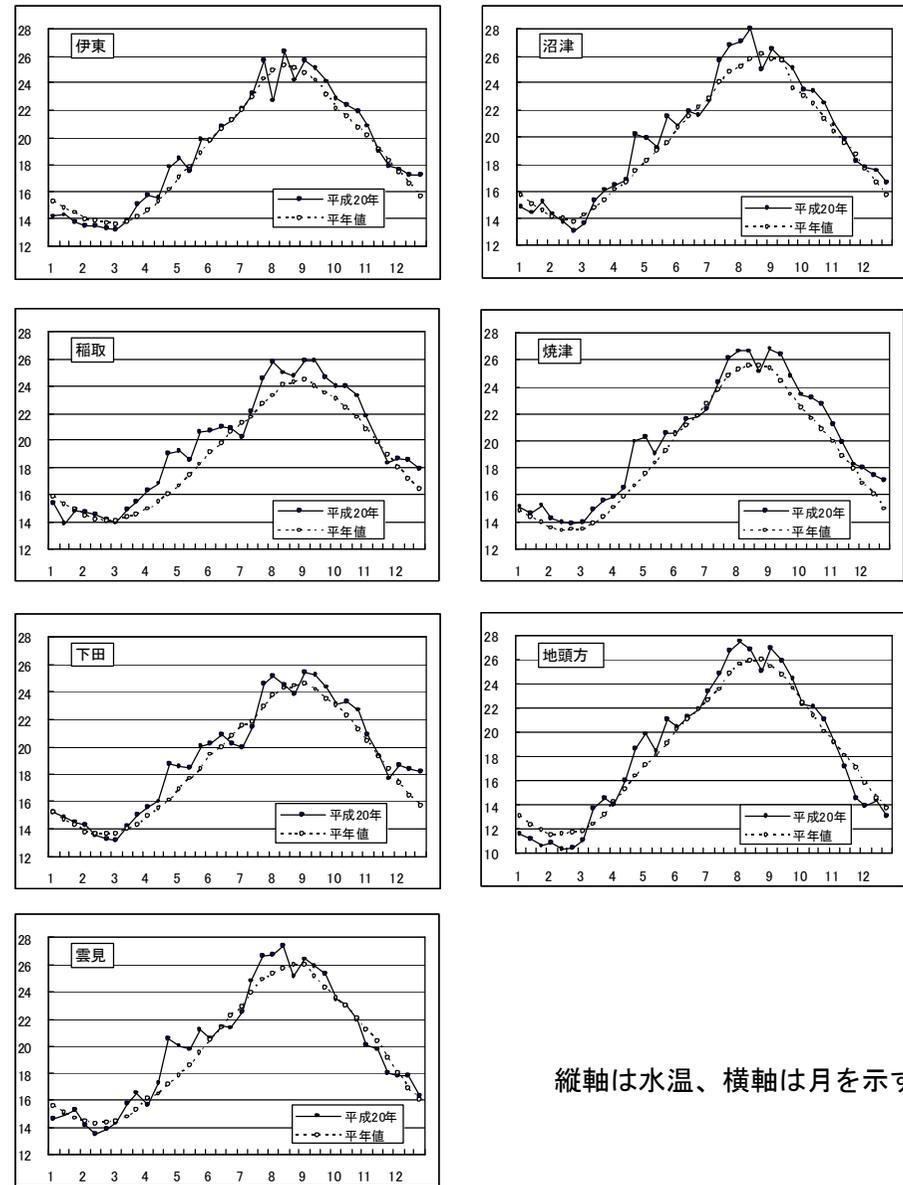


図2 平成20年1～12月の黒潮流路(海上保安庁海洋情報部「海洋速報」) 前半 後半

\*静岡県水産技術研究所一部改変

## 【県下沿岸域】

図3に平成20年1～12月の沿岸水温の変化を旬別に示した。1～2月は一時的な暖水波及はみられたが、冷水に覆われていたため低め基調であった。3～4月には小蛇行の東進や内側反流の発達にともない、暖水が波及したことで高め基調であった。また、4月後半には、黒潮の北上部が伊豆半島に接近したことで駿河湾、相模湾内への暖水波及が顕著になり、駿河湾内で急潮が発生した。6月は平年並みであったが、7月以降、黒潮内側反流が断続的に形成されたことで高め基調であった。11月は蛇行部分が拡大し、また顕著な暖水波及もなく低め基調となったが、12月には黒潮北上部から暖水が波及したことで高め基調となった。



縦軸は水温、横軸は月を示す

図3 平成20年1～12月の旬別沿岸水温の変化

## 【サバたもすくい棒受網】

### 1 たもすくい

平成20年の伊豆諸島海域におけるたもすくい漁は1月15日から（棒受網は1月10日から）、三宅島周辺海域でのゴマサバを対象とした操業で始まった。

1月下旬の黒潮は33°N付近を東進した後、141°E付近を北上する離岸傾向で推移し、大室出し、利島、ひょうたん瀬などの伊豆諸島北部海域に表面水温15～17℃台の暖水が分布したが、マサバの集群には至らず、2月まで三宅島周辺海域でゴマサバを対象とした操業が続いた。3月に入ると、黒潮は138°E付近から東北東へ流去する接岸傾向となり、中旬には伊豆諸島北部海域の表面水温は18℃を越え、ひょうたん瀬にマサバ主体の漁場が形成された。4～5月には主漁場が利島～大室出しに移り、4月上旬～5月上旬の1夜1隻あたり水揚量は2～3トン前後（大型船では9～15トン）へ好転した。また、4月下旬には黒潮北上部が伊豆諸島北部海域まで東進し、同海域の表面水温が16℃台から21℃台に大きく昇温したことからゴマサバの混獲率が増加したが、5月上旬には、東進してきた冷水、房総沖から張り出した親潮系冷水の影響により同海域の表面水温は18～20℃台に降温し、ゴマサバの混獲率も減少した。5月下旬には黒潮が房総半島に接岸し内側反流の勢力が強まったため、伊豆諸島北部海域の表面水温は再び20～22℃台へ昇温した。このため、6月以降マサバ漁場は形成されず、三宅島周辺海域でのゴマサバを対象とした操業に変わり6月末で終漁となった。

マサバは、卓越年級群である4歳魚<sup>\*1</sup>（2004年級群）が尾叉長34～39cmで、昨年引き続き漁獲の主体となった。また、4月以降、尾叉長30cm未満の1歳魚（2007年級群）も漁獲された（図4）。ゴマサバは、尾叉長24～35cmの群が漁獲の主体となりモードは26cmと29cmに見られた。前者の小型群は1歳魚（2007年級群）主体、後者の30cm前後の群は2歳魚（2006年級群）・3歳魚（2005年級群）主体と考えられた。

平成20年1～6月の千葉県・神奈川県・静岡県主要7港<sup>\*2</sup>におけるたもすくい水揚量は、マサバが815トンで昨年（2,673トン）の31%、ゴマサバが2,381トンで昨年（1,328トン）の179%であった。マサバ水揚量が昨年を下回った理由として、マサバ4歳魚など親魚の来遊水準が昨年に比べ低かったことや、マサバ主体の漁場形成期間が3月中旬～5月上旬と短かったことが考えられる。

\*1 年齢は1月に加齢し、平成20年（2008年）時のものを示した。

\*2 千倉・富浦（千葉県）、三崎・長井（神奈川県）、伊東・沼津・小川（静岡県）の7港。

### 2 棒受網

平成20年における静岡県棒受網船は、3、4月にマサバ狙いのたもすくいへの転換もあったものの、年を通じて三宅、三本など三宅島周辺海域でゴマサバ主体の操業を行った。また、5～7月には銭洲周辺海域への出漁も見られた。平成20年の静岡県主要4港<sup>\*3</sup>における棒受網（一部たもすくいも含む）の1夜1隻あたりゴマサバ水揚量は25.5トンで、昨年（14.2トン）および平成18年（22.9トン）を上回った。

漁獲されたゴマサバの尾叉長は、7～12月（1～6月はたもすくいとほぼ同じ）を通じて24～43cmであったが、8月以降30cm以上の割合が少なくなり小型魚主体となった。すなわち、7月のモードは28cm、33cmに見られたが、8月は26cmモードの単峰となり、9月は28cmモード、10月は27cmモード、11月は28、30cmモード、12月は29cmモードで経過した。年齢査定の結果、漁獲対象群の多くは1歳魚（2007年級群）であり、2歳魚（2006年級群）・3歳魚（2005年級群）が混じた。なお、昨年は8月以降に0歳魚（2007年級群）が出現し10月以降に漁獲の主体となったが、平成20年は体長測定で11月に21～22cmの0歳魚（2008年級群）と思われる個体を確認したのみで、年齢査定でも0

歳魚の出現割合は少なかった。

平成20年の静岡県主要4港における棒受網の水揚量は、マサバが346トンで昨年(1,502トン)の23%、ゴマサバが14,534トンで昨年(9,054トン)の161%であった。また、サバ類全体としては、14,880トンで昨年(10,556トン)の141%であった。マサバ水揚量が昨年を下回ったのは、たもすくいと同様の理由によると考えられる。また、ゴマサバ水揚量が昨年を上回った理由として、1歳魚(2007年級群)の来遊水準が比較的高いことや、サンマ兼業船の一部が8月以降にもサバ操業を行ったこと等が考えられる。

\* 3 伊東、静浦、沼津、小川の4港。

### 3 小川港におけるサバ類単価

平成20年の小川港における棒受網(一部たもすくいも含む)のサバ類月別単価は、マサバが105~464円/kg(2~5月のみ)、ゴマサバが48~98円/kgであった。水揚の主体となったゴマサバについては、10月を除いて50円/kgを下回ることはなく、堅調に経過した。

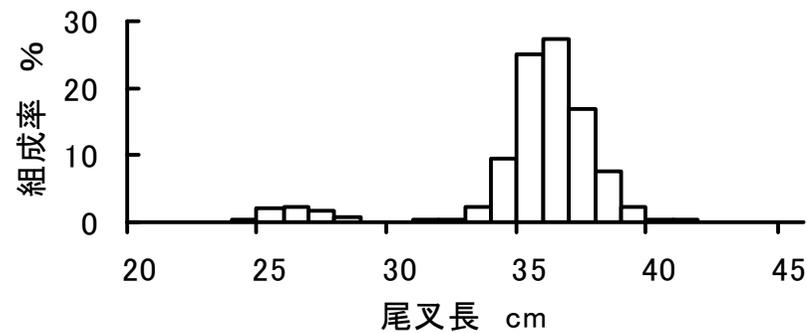


図4 平成20年1~6月のたもすくいによるマサバの尾叉長組成

### [サクラエビ船曳網]

平成20年の春漁は、4月2日夜~6月1日夜にかけて操業が行われた。出漁日数は19日、漁獲量は1,298トンで、漁場は主に田子の浦沖に形成された(前年の出漁日数は23日、漁獲量は1,296トン)。漁獲されたサクラエビは、平均体長37.9mmの当歳エビ(前年は36.0mm)が主体であった。

秋漁は11月4日夜~12月24日夜にかけて操業が行われた。出漁日数は11日、漁獲量は542トン、漁場は主に大井川~相良沖に形成された(前年の出漁日数は13日、漁獲量は551トン)。漁獲されたサクラエビは、平均体長31.5mmの当歳エビ(前年は33.6mm)と平均体長41.1mmの1歳エビ(前年は42.1mm)の2群で構成された。

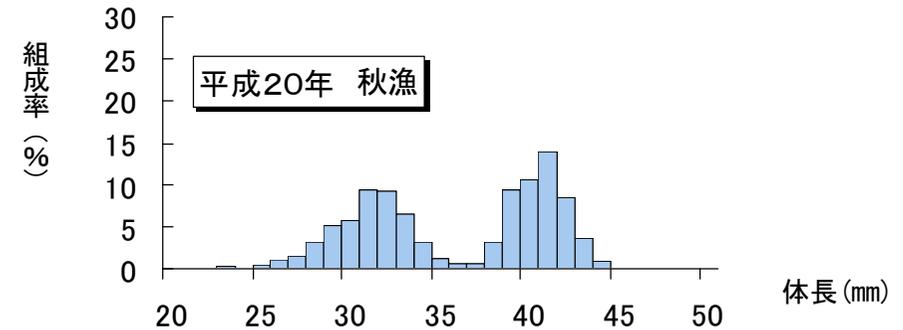
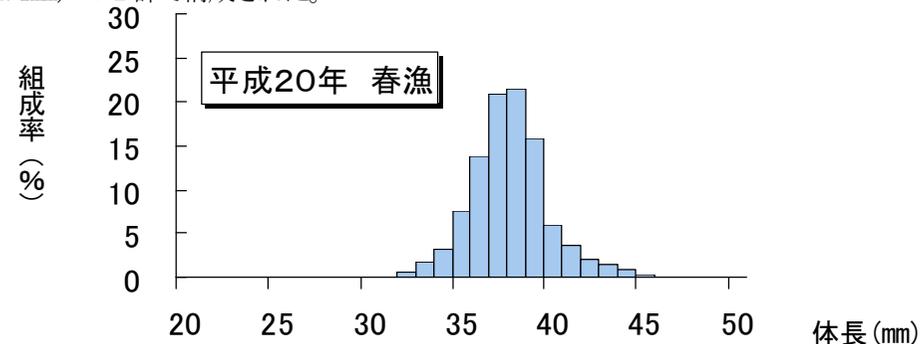


図5 平成20年春・秋漁のサクラエビ体長組成

### [竿釣近海カツオ]

・水揚量と魚価

平成20年の静岡県主要5港(沼津、清水、焼津、小川、御前崎)における近海竿釣り船の水揚量は、787トンで平成19年の1,092トンを下回り、過去5か年平均(3,451トン)の23%であった。魚価は478円/kgで平成19年の448円/kgを上回った。

・漁況(漁場形成と魚体)

近海竿釣り船のQRY、御前崎港での市場調査によれば、漁況はおおむね下記のとおり推移した。

- 1月 静岡県の近海竿釣り船は、下旬から今年の操業を開始し、東海神場・ハロース周辺海域で特々大、特大、大、中、小、極小カツオを漁獲した。
- 2月 東海神場、ハロース周辺海域で特大、大、中カツオを漁獲した。
- 3月 上・中旬は22°~27°N、135°~150°Eで特々大~大カツオを主体に漁獲した。下旬は25°~27°N、138°~149°Eで特々大~小カツオを漁獲した。
- 4月 上旬は24°~27°N、138°~145°E、中旬は25°~27°N、141°~143°Eで特大カツオ主体に漁獲した。下旬は33°~35°N、138°~141°で小、極小カツオ主体に漁獲した。
- 5月 上旬は31°~35°N、137°~141°E、中旬は33°~35°N、138°~140°E、下旬は33°~35°N、137°~142°Eで小、極小カツオ主体に漁獲した。
- 6月 主漁場は常磐・三陸沖に移動し、静岡県近海では上・中旬に32°N、140°E付近で小、中、極小カツオを漁獲した。
- 7月 沿岸竿釣り船(他県所属)はイナンバ、三宅、ハロースで漁獲した。近海竿釣り船の水揚げはなかった。
- 8月 沿岸竿釣り船は青ヶ島、ハロースで漁獲した。近海竿釣り船の水揚げはなかった。
- 9月 沿岸竿釣り船はハロース付近で漁獲した。近海竿釣り船の水揚げはなかった。
- 10月 沿岸竿釣り船はハロース付近で漁獲した。近海竿釣り船の水揚げはなかった。
- 11月 静岡県の近海竿釣り船は、三陸沖から移動し八丈島付近で漁獲した。

表2 平成20年近海竿釣り船のカツオ水揚量等 (県内主要5港)

年月	水揚量(トン)	水揚隻数	水揚/隻(トン)	平均単価(円/kg)	主漁場と魚体(体長cm)
20年1月	95	3	31.7	255	小笠原諸島周辺(55cm、65cmモード)
2月	25	2	12.5	414	小笠原諸島周辺(54cmモード)
3月	102	16	6.4	610	小笠原諸島周辺
4月	277	39	7.1	496	上・中旬:小笠原諸島周辺、下旬:伊豆諸島周辺(44cmモード)
5月	257	56	4.6	509	伊豆諸島周辺(45cmモード)
6月	27	5	5.4	341	伊豆諸島周辺(45cmモード)
7月	0	0	-	-	*什ヶ、三宅、ハロース(46cmモード)
8月	0	0	-	-	*青ヶ島、ハロース(48cmモード)
9月	0	0	-	-	*ハロース(47cmモード)
10月	0	0	-	-	*ハロース(41cm、54cmモード)
11月	4	3	1.3	495	八丈島付近(39cmモード)
12月	0	0	-	-	
20年計	787	124	6.3	478	
19年計	1,092	203	5.4	448	
5年平均	3,451	458	7.5	323	平成15~19年の平均

※沿岸竿釣り船の情報

【まき網】

1 マイワシ

本年の静浦漁港における総水揚量は5.7トンで、前年(3.2トン)の178%であったが、平年(過去5年平均:172トン)に対して3%と極めて低調であった。

沼津港における総水揚量は289トンで、前年(329トン)の88%、平年(過去5年平均:1,451トン)の20%と極めて低調であった。総水揚量に対し3月が32%と最も多く、以下10月が24%、5月が21%であった。

小川港における総水揚量は89トンで、前年(126トン)の71%、平年(802トン)の11%と極めて低調であった。総水揚量に対し3月が64%と最も多く、以下7月が21%、10月が7%であった。

伊東港における総水揚量は62トンで、前年(28トン)の2.2倍、平年(114トン)の54%と、前年を上回ったものの低調であった。総水揚量に対し11月が44%と最も多く、以下7月が36%、9月が19%であった。

2 カタクチイワシ

本年の静浦漁港における総水揚量は382トンで、前年(1,046トン)の37%、平年(1,275トン)の30%と、前年および平年を下回った。3~6月だけ水揚があり、特に5月に集中し、総水揚量の85%を占めた。

沼津港における総水揚量は185トンで、前年(40トン)の4.6倍、平年(過去5年平均:67トン)の2.8倍と好調であった。総水揚量に対し5月が51%と最も多く、次いで6月が34%であった。

注) 平年:過去5年平均

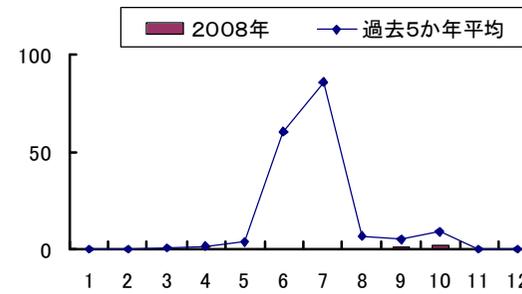


図6 静浦漁港マイワシ月別水揚量の推移

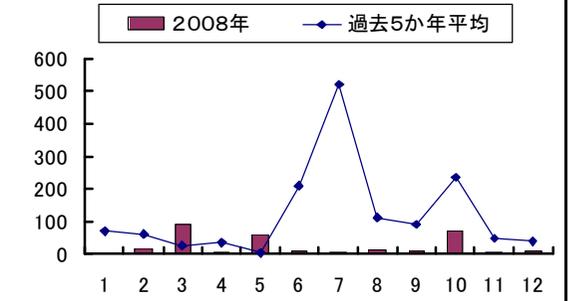


図7 沼津港マイワシ月別水揚量の推移

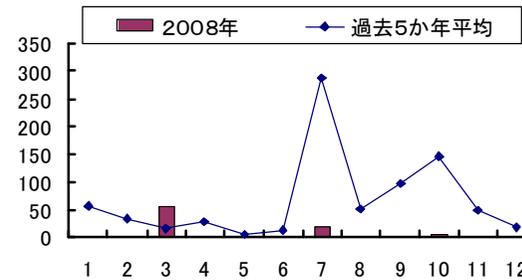


図8 小川港マイワシ月別水揚量の推移

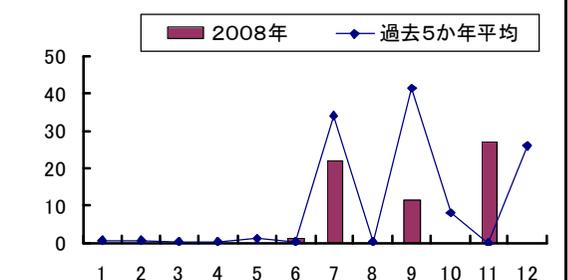


図9 伊東港マイワシ月別水揚量の推移

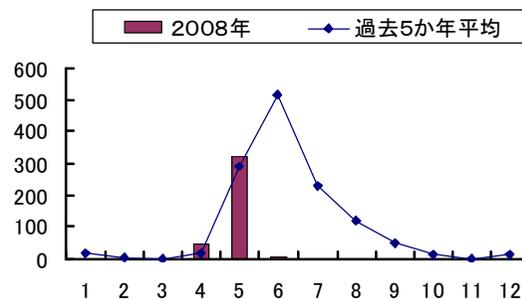


図10 静浦漁港カタクチ月別水揚量の推移

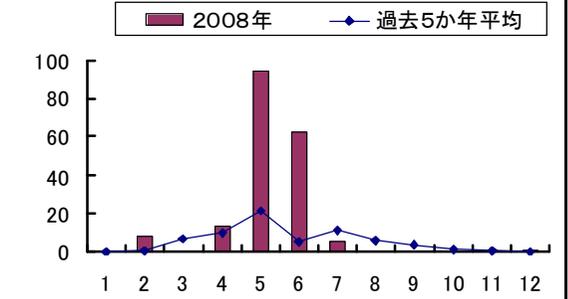


図11 沼津港カタクチ月別水揚量の推移

(注) 図6~11の縦軸は水揚量(トン)、横軸は水揚月

【シラス船曳網】

平成20年シラス漁は3月21日から始まった。3~12月の主要6港(静岡、吉田、御前崎、遠州、舞阪、新居)における総水揚量は7,472トンで、前年(7,736トン)の97%、平年(5,947トン)の126%と、前年並みで平年を上回り、特に3~6月の水揚量は5,527トンと過去20年間で2番目となった。総水揚金額は4,170,057千円で、前年(4,404,779千円)の95%、平年(3,920,543千円)の106%と、ほぼ前年並み、平年並みであった。平均単価は558円/kgと前年(569円/kg)の98%、平年(707円/kg)の79%だった。

1日1か統当りの水揚量の推移を月別にみると、3月は平均450kg(駿河湾250kg、遠州灘553kg)、

4月上旬は575kg（駿河湾282kg、遠州灘726kg）と解禁当初から好漁となった。その後、4月中旬には364kg、下旬には487kgと減少したものの、月全体では477kg（駿河湾370kg、遠州灘534kg）と平年（344kg）を上回った。5月に入り800kg以上とさらに上向き、月全体では984kg（駿河湾788kg、遠州灘1,063kg）と平年（379kg）を大きく上回った。6月も上旬は1,233kg、中旬は601kgと好漁が続いたが、下旬には346kgと落ち込んだ。月全体では908kg（駿河湾786kg、遠州灘982kg）と平年（356kg）を大きく上回った。しかし、7月には一転して低調となり、上旬292kg、中旬199kg、下旬110kgと徐々に減少し、月全体では193kg（駿河湾74kg、遠州灘247kg）と平年（371kg）を大きく下回った。8月も中旬まで200kg台と平年の50%で推移し、下旬は246kgで平年並みとなった。月全体では221kg（駿河湾241kg、遠州灘214kg）と平年（345kg）を大きく下回った。9月は遠州灘では134～301kgで引き続き低調だったが、駿河湾では357～447kgと好漁となり、月全体では290kgで平年の81%まで回復した。しかし、10月は193kg（駿河湾191kg、遠州灘195kg）で平年の67%となった。その後、11月は153kg（駿河湾155kg、遠州灘151kg）、12月は93kg（駿河湾68kg、遠州灘120kg）で、平年並みで推移した。

水揚量の推移を月別にみると、3月は380トンで平年同期（76トン）の5倍、4月は1,140トンで平年同期（741トン）の1.5倍、5月も2,486トンで平年同期（977トン）の2.5倍、6月には1,521トンと平年同期（830トン）の1.8倍と、6月まで平年を大きく上回った。その後、漁模様が一転して、7月には194トンで平年同期（827トン）の23%と平年を大きく下回り、昭和60年以降の最低となった。8月は504トンと平年同期（663トン）の76%、9月は539トンと平年同期（858トン）の63%、10月は418トンで平年同期（706トン）の59%と平年を下回った。11月には223トンと平年同期（207トン）の108%、12月には67トンで平年同期（61トン）の110%と平年を上回った。

平均単価を月別にみると、7月以降は平年並みから上回ったが、好漁であった3～6月は平年を下回り、特に5、6月は平年の65%以下の安値で推移した。

今漁期の特徴としては、前年と同じく6月までの春漁が記録的な好漁となり、7月以降は低調に推移したことがあげられる。また、9月に遠州灘と比較して駿河湾で好漁となったが、これも前年と同様であった。春漁が好漁だった要因として、解禁当初にマシラスがまとまって漁獲されたこと、その後カタクチシラスにスムーズに切り替わったこと、黒潮系暖水が沿岸に波及したことが考えられる。7月以降、低調となった要因として、カタクチイワシ卵稚仔の量が少なかったこと、黒潮が離岸したことにより黒潮系暖水の波及がなかったことが考えられる。 注）平年：過去5か年平均

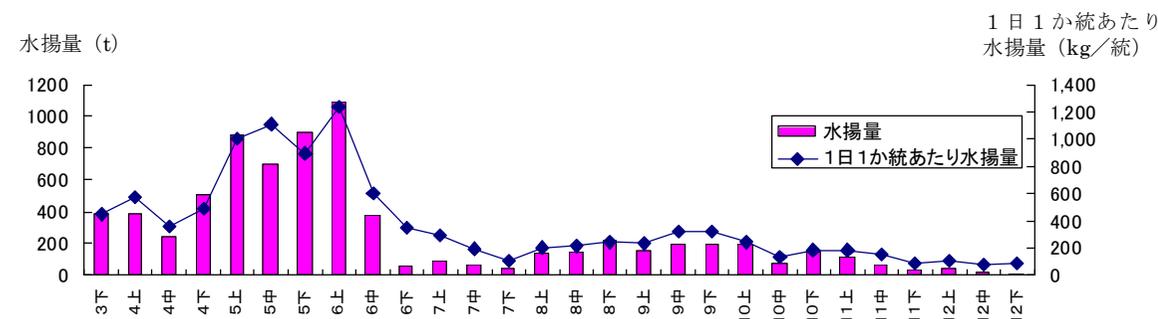


図12 平成20年主要6港旬別シラス水揚量と1日1か統あたり水揚量の推移

### 〔定置網〕

平成20年の伊豆半島東岸大型定置網8か統（伊豆山、古網、赤石、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津）の漁獲量は4,044トンで、これは前年漁獲量3,841トンの105%、平年漁獲量（昭和57年～平成19年平均）3,857トンの105%であった。月別にみると、漁獲量が最も多かったのは5月の728トンで、漁獲量の最も少なかったのは1月の110トンであった。また、12月が2番目に多く542トンと前年の405%、平年の204%と昭和57年以降のこの月の漁獲量として最多であった。魚種別漁獲量の上位10種は以下の通りであった。

- 1 サバ類（さばっこを除く）：1,359トン（前年の141%、平年の158%）
- 2 マアジ（じんだを除く）：613トン（前年の98%、平年の85%）
- 3 カタクチイワシ：611トン（前年の132%、平年の193%）
- 4 マルソウダ：397トン（前年の162%、平年の204%）
- 5 スルメイカ：225トン（前年の96%、平年の152%）
- 6 銘柄わらさ：112トン（前年の99%、平年の199%）
- 7 ヤマトカマス：89トン（前年の47%、平年の137%）
- 8 銘柄ぶり：66トン（前年の210%、平年の122%）
- 9 イサキ：57トン（前年の65%、平年の113%）
- 10 シイラ：56トン（前年の100%、平年の108%）

サバ類（「さばっこ」を除く）は、年間を通じてゴマサバが主体で、3月は平年の10%以下ときわめて低調でしたが、4～5月は平年及び前年を大きく上回った。6月は平年並となったが、7月には前年及び平年の2倍以上漁獲された。8月は前年を上回ったものの平年を下回り、9月には前年及び平年を大きく下回り、前年多かった10月には前年の12%と低迷し平年の半分程度と低迷した。11月には再び前年及び平年を上回り、12月には332トンと昭和57年以降の最高値の144トンの倍以上漁獲された。年間漁獲量は前年の141%、平年の158%と上回った。マサバは5月に24トンと漁獲されたが前年及び平年を下回り、8月に9トンと前年を上回ったが平年を下回ったが、12月には6トンと前年及び平年を大きく上回った。年間では62トンが漁獲され、前年の76%、平年の83%と前年及び平年を下回った。2008年級群は「さばっこ」として12月に3トン漁獲されたが年間4.6トンで、好調だった前年及び平年を大きく下回った。また、漁獲されたサバ類のサイズは4月のゴマサバの尾叉長モードが34cmであったが、5月には27cmと30cmと小型化し、6月以降は31～32cmにモードがみられ、12月には「さばっこ」として23cmにモードのある当歳魚も漁獲されていた。マサバの尾叉長のモードは4～5月には38cmにみられ、8月にもモードは38cmであったが、5月には27cmにもモードがみられた。12月にはモードが33cmと小型化し、「さばっこ」として20cmにモードのある当歳魚も漁獲されていた。

マアジは、上半期には2月と3月を除き前年を下回り、すべての月で平年を下回り、とくに漁獲盛期となる5月に71トンしか漁獲されず前年及び平年の半分以下であった。下半期にはすべての月で前年及び平年を上回り、7～11月に50トン以上の漁獲が続き、年間漁獲量は前年並の613トンで平年をやや下回った。漁獲サイズは3～4月は尾叉長のモード19cmの1歳魚中心で、5月にはモード25cmの2歳魚中心に漁獲され、6月にはモード23cmの1歳魚もみられたが、モード12cmの当歳魚が「小あじ」として漁獲の中心となった。7月にはモード13cmの当歳魚が中心で21cmの1歳魚もみられたが、8月以降は当歳魚が中心となり、尾叉長のモードは8月に15cm、9月に16cm、10月に18cmと成長しながら漁獲されたが、11月には17cmとやや小型化し、12月には18cmであった。「じんだ」は4月から漁獲が始まり、5月に10トンと昭和57年以降で最も多く漁獲され、前年及び平年を大きく上回っ

たが、6月後半には「小あじ」となり「じんだ」は2トンと減少した。年間では13トンと前年及び平年を下回ったが、当歳魚の加入時期が早く、加入量は多かったものと考えられた。

カタクチイワシは、3月に293トンと前年及び平年を大きく上回り、昭和57年以降で2番目に多く漁獲され、前年は全く漁獲がなかった12月に93トンと昭和57年以降で2番目に多く漁獲され、年間漁獲量は前年及び平年を上回った。

マルソウダは5月に278トンと昭和57年以降で最も多く漁獲され、漁獲盛期となる9～11月には前年及び平年を下回ったが、年間漁獲量は前年及び平年を上回った。

スルメイカは2月には81トンと昭和57年以降で最も多く漁獲され、年間漁獲量は前年並で平年を上回った。

ブリは、銘柄ぶりの漁獲量は66トン(8,758尾)で前年を大きく上回り平年をやや上回った。3月に6,708本、4月に1,739本入網し、魚体は3歳魚(2004～2005年級群)主体であった。また、「わらさ」が8月に32トン入網し、5月、7月、10月にも10トン以上入網し、112トンと前年並で平年を大きく上回った。銘柄いなだの漁獲量は21トンと前年を下回り平年をやや下回った。2008年級群である銘柄わかしの漁獲量は15トンで、多かった前年を大きく下回り平年並であった。

ヤマトカマスとイサキは平年をやや上回ったものの前年の半分程度で、シイラは漁獲盛期の6月には平年の半分程度であったが8月に20トンと前年及び平年を大きく上回り、年間漁獲量は前年及び平年並であった。

昨年まで「漁海況月報号外」という名称で発行していましたが、本号から「漁海況年報」に変更しました。

静岡県水産技術研究所のホームページ

パソコンからは…… <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/>

携帯電話からは…… <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/imode/index.htm>

右のQRコードをご利用ください。人工衛星NOAAによる海面の水温分布画像を見ることができます。

